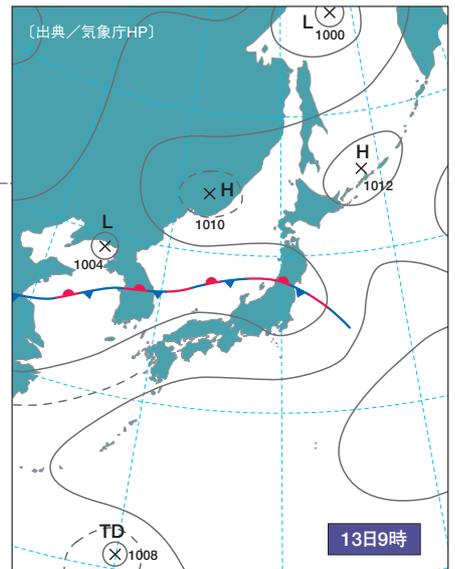


新潟・福島豪雨

災害発生日 ●平成16年7月12日～13日
 主な被災地 ●新潟県・福島県

6河川11箇所で堤防が決壊 濁流がすべてを呑み込んだ

7月13日、突然の大豪雨が新潟県を襲った。降り続く雨で河川は増水し、五十嵐川や刈谷田川はまたたく間に警戒水位を超えた。ついには荒れ狂う川に堤防が耐え切れず決壊、泥流が市街に流れ込む。家屋の倒壊、流出が相次ぎ、水が引いた後には無惨な街の姿が残された。人的被害は死者16人、負傷者4人。住家被害は全壊70棟、半壊5354棟、一部破損94棟。



刈谷田川の上流に位置する栃尾市で、7月13日の雨量は421mmに達した。これは栃尾雨

**未曾有の集中豪雨
 1日で7月の平年雨量の2倍**

静かに降り始めた雨はその後、停滞し、発達した梅雨前線の影響を受けて記録的な豪雨となり、周辺一帯に甚大な被害をもたらした。

7月12日夜——。新潟県中越・下越地方で

中でも最も激しい降雨に見舞われたのが、

▼浸水した三条市街 [写真提供/北陸地方整備局]



量観測所における平年7月の月間雨量の約2倍に匹敵する。つまり、たった1日で2カ月分の雨量に近い雨が栃尾市内に降り注いだことになる。また、信濃川最下流域の帝石橋付近の流域平均2日間雨量も約270mmを記録。この数値は1978年6月に記録した335mmに次ぐ戦後2番目の大雨で、確率的には150年に1度の割合で発生する雨量に相当する。

そのほか、三条市内でも12日18時から13日0時までには216mm、流域上流部の笠堀ダム、刈谷田川ダムでも12日21時から14日11時までの総雨量がそれぞれ489mm、433mmを記録するなど、短時間で中越・下越地方はすさまじい集中豪雨に見舞われた。

さらに、この未曾有の大豪雨は次第に水害の様相をみせ始める。降り続ける雨によって河川は増水、13日の午前中に信濃川下流域に設置された6箇所の水位観測所すべてで警戒水位を超え、このうち4観測所で観測史上最高の水位を記録した。強い雨が短時間で集中的に降ったため、刈谷田川ではわずか1時間のうちに2m近い水位上昇を観測した地点もあったほどだ。

河川流量の増加に伴い、刈谷田川、五十嵐川の上流ではダムが洪水調節を開始。五十嵐川上流では、笠堀ダムが13日の4時30分から洪水調節に入り、9時21分には毎秒730m³を調節した。また、7時37分には大谷ダムが、8時9分には刈谷田川ダムも洪水調節を開始し、それぞれ河川の氾濫を懸命に食い止めていた。

だが、時間が経つにつれ、雨足はますます強まっていく。危険を感じた自治体は続々と災害対策本部を設置。三条市では9時に、栃尾市では10時に対策本部が設置され、10時30分には、新潟県が「新潟県梅雨前線豪雨災害警戒本部」を設置することになる。さらに、三条市は10時15分に五十嵐川下流域の三竹や曲淵、月岡などに住む計4539世帯に避難勧告を発令、広報車を走らせて住民に避難を呼びかけた。ところが、バケツをひっくり返したような激しい雨に呼びかけはかき消されてしまい、避難勧告に気がつかなかった住民もいたという。こうした避難勧告・指示の発令は12市町村で延べ1万3513世帯にのぼった。



▲刈谷田川の決壊で浸水した新潟県中之島町〔写真提供／共同通信社〕

▼洪水で流された墓地〔写真提供／北陸地方整備局〕



刈谷田川と五十嵐川が決壊 濁流が街を呑み込んだ

中之島町でも、10時過ぎに刈谷田川が警戒水位を超えたことから、消防団や役場職員による監視体制を強化。各地で地元の水防団が土のう積み作業などを行い、堤防の決壊に備えた。12時40分には中之島地区に住む817世帯に避難勧告を出したが、そのわずか12分後、猛威を振るう流れに堤防が耐え切れず、中之島地区を貫く刈谷田川の左岸が50mにわたって決壊（破堤）し、鉄砲水のような濁流が大量の土砂とともに同地区に流れ込んだ。13時7分頃には、三条市嵐南地区で五十嵐川左岸が117mにわたって決壊。この決壊箇所は河川のカーブの「内側」であった。

この洪水による決壊箇所は五十嵐川や刈谷田川など6河川、計11箇所に及び、泥流が市街地や農地に怒とうのごとく流れ込み、家屋の倒壊、流出が相次いだ。こうした高速氾濫流による住宅被害は全壊が68世帯、半壊は5437世帯に達した。

決壊後にまるで津波のように濁流が押し寄せてきた時、住民は各地で一斉に避難を

開始したが、浸水のスピードがあまりにも速かったため、家屋の2階や屋根の上に取り残される人が多数出た。多くの被災者の証言によれば、「気づいた時には、もう目の前に水が迫っていた。水はほんの数分で自宅1階の天井近くにまで達し、避難する暇もなかった」という。中之島町では保育所が水の中で孤立。ヘリコプターによる必死の救助が実施された。また三条市、見附市、中之島町など5市町村の小学校6校、中学校4校も水に囲まれて孤立。児童・生徒ら1400余人が帰宅できなくなり、校舎内で不安な一夜を過ごした。7月14日付新潟日報によれば、13日の夜に避難所で一夜を過ごした人の数は2万人に達したという。

時間の経過とともに拡大していく被害に対し、各地で復旧作業や救助活動が一斉に開始された。12時30分、新潟県の平山征夫知事は自衛隊に災害派遣を要請し、さらに緊急消防援助隊および海上保安本部にも応援を要請。これらの防災機関は、7月13日から15日にかけての3日間で約7500人を救助し、そのうち周囲を水に囲まれ孤立し、自宅などに取り残された500人以上の住民をヘリコプターで救出している。



▲荒れ狂う濁流の中で懸命な救助活動が行われた（写真提供／毎日新聞社）

▼刈谷田川の氾濫で冠水した中之島町一帯（写真提供／共同通信社）





▲孤立した中之島中学校〔写真提供／共同通信社〕



▲五十嵐川の越水を食い止める水防活動（三条市三竹地区）〔写真提供／新潟県土木部〕



▲長岡市浦瀬町で発生した土石流〔写真提供／新潟県土木部〕



▲氾濫により発生した大量のゴミ（中之島町中之島）〔写真提供／北陸地方整備局〕



▲洪水時に大量の水を溜め込んだ刈谷田川ダム（左：洪水前、右：洪水時）〔写真提供／新潟県土木部〕

排水機場が水没の危機 決死の水防活動が街を救う

中之島町の最下流部に位置する大沼排水機場では懸命に内水を排水していた。だが、刈谷田川の氾濫水が排水機場の所まで迫り、

そのうち大沼排水機場そのものが水没の危機にさらされた。

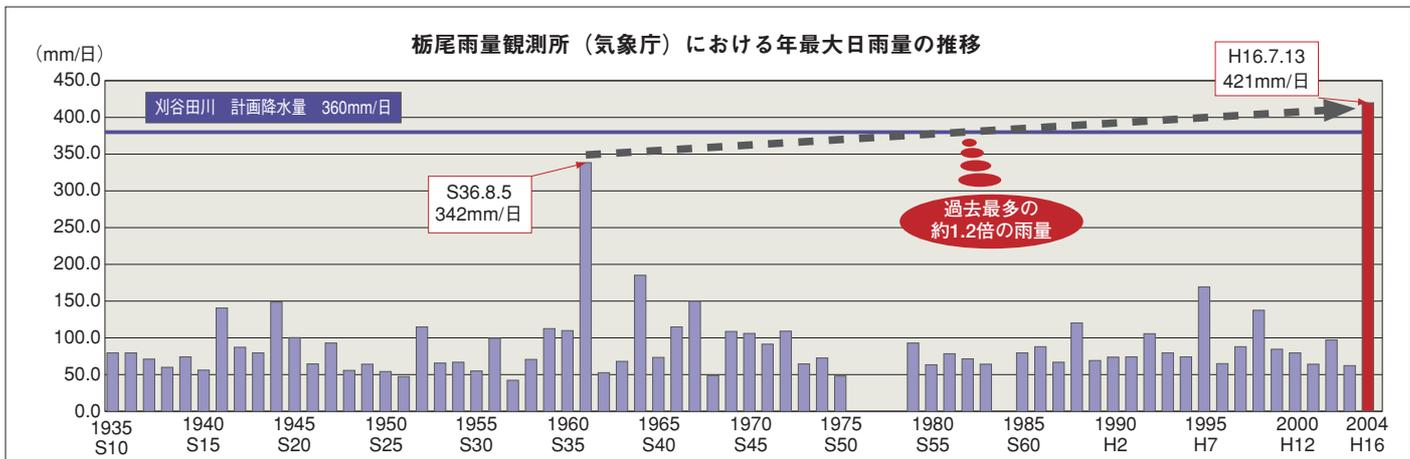
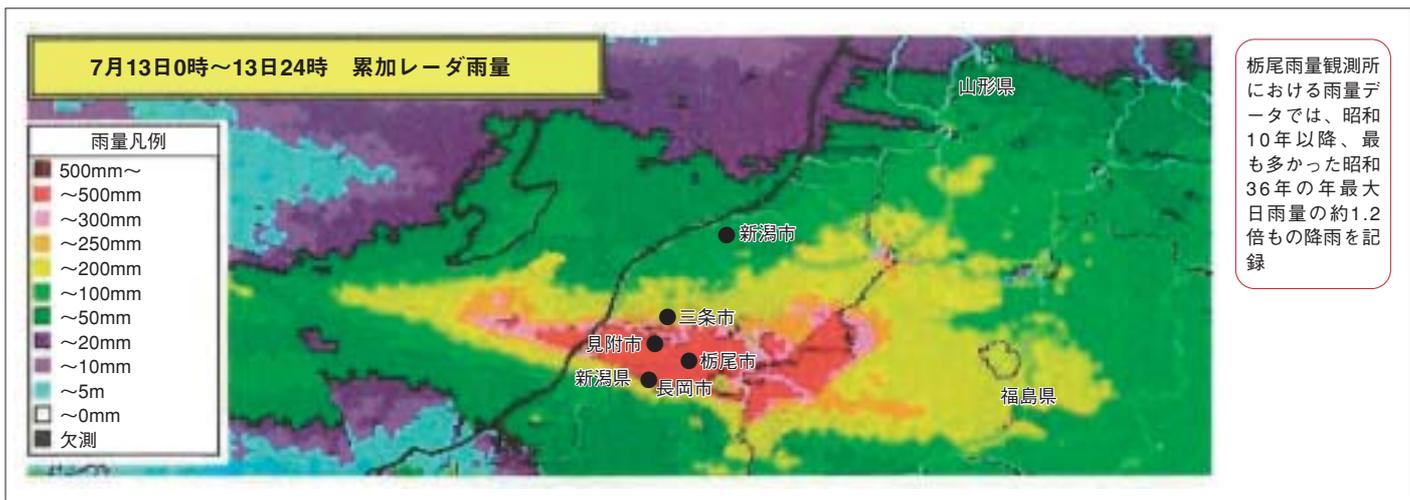
「排水機場が水没すると、洪水が中之島町全域に広がる！」

尋常ならざる事態に危機を抱いた中之島消防団は、昼夜兼行で排水機場の周囲に土のうを積み上げ、機場内への浸水を阻止。

同消防団の活躍により、大沼排水機場は辛くも水没を免れた。

決壊による浸水被害のほかに、降り続ける雨によって各地で土砂災害が発生。その数は274件に達し、栃尾市、出雲崎町で2人が死亡した。

栃尾市では、土砂崩壊によって市外に通



平年の7月の1か月分の雨量を大きく上回る量がたった1日に降った〔資料提供／北陸地方整備局河川部〕

じる主要幹線道路がすべて寸断され、一時、陸の孤島となった。磐越自動車道も津川－会津坂下間で通行止め。そのほか、津川町の国道49号、三条市の国道289号など十数本の国道が土砂崩れで通行止めとなった。

犠牲者の8割が高齢者 避難支援のあり方が課題に

また、この新潟・福島豪雨で16人の尊い命が犠牲になった。そのうち13人が70歳以上の高齢者で、中には寝たきりや独り暮らしの方もいた。死因は約半数が溺死で、水かさが急激に上昇する中、必死で自宅2階に逃げようとしたり、外に逃げようとしたところを、容赦なく濁流に呑み込まれたのである。高齢者等の避難支援のあり方

が、課題として浮き彫りとなった。

高齢者の犠牲者が多いとコミュニティーに問題があったと思われがちだが、三条市等では豊かな地域コミュニティーが形成されていたものの、避難するための時間的余裕がなかったため十分に機能せず、多くの高齢者の方が亡くなったと考えられている。

また、高齢者対策と合わせ、避難勧告等の発令時期、発令基準、情報伝達のあり方等の課題が認識された。

水が引いた後、被災者の前に残されたのは、膨大な量の土砂とゴミだった。五十嵐川および刈谷田川の決壊によって、三条市内には延べ3000m³、中之島町内には延べ4万m³もの土砂が流れ込み、路面や住宅内に堆積。周辺から流出したと思われる棚や皿などの生活用品も散乱し、道路脇には使用物にならなくなった電化製品や家具などが

うず高く積まれた。住民は、水浸しになり、すっかり変わり果てた自宅の姿に呆然としながら、浸水した自宅1階から箒^{ほうき}などで泥をかき出し、家具の汚れを洗い流す作業に忙殺された。これらの土砂とゴミを合わせた災害廃棄物の発生総量は、約6万t（11万m³）にも達していた。

集中豪雨と堤防決壊による浸水・冠水は、新潟県経済にも大打撃を与えている。三条市に本社を置く大手暖房器具メーカーの本社社屋や工場も浸水。そのほか、金属・機械加工業者、繊維メーカーでも軒並み生産設備が浸水し、企業活動が完全にストップした。

豪雨による中小企業の被害は34市町村、2188事業所に及び、被害総額は330億円を超え、農作物も大きな被害を受けるなど地場産業に深刻なダメージを与えた。

【インタビュー】

INTERVIEW



新潟県中之島町 中之島保育所長
松井光子氏

私が語り継いでいかなければ…

～孤立した保育所で恐怖を感じた濁流の轟音～

新潟・福島豪雨で、刈谷田川下流の新潟県中之島町で堤防が決壊、周辺地域が浸水し、町立中之島保育所が孤立した。職員は児童を連れて2階に上がって難を逃れ、自衛隊のヘリコプターで救助された。その時の様子を松井所長に伺った。

松井所長は恐ろしい記憶を振り返ることに抵抗があり当初、気が進まなかったが、後世に語り継ぐべきと考え直してインタビューに応じたという。

●被災の時の様子を教えてください。

その日（7月13日）は午前中、お孫さんを迎えに来たおばあちゃんが「刈谷田川の水位が上がっていて危ない」と言って帰ったのを覚えています。町役場に問い合わせると、「大丈夫だ」と言われましたが、5分もたたないうちに再び電話があり、すぐに子どもたちを保護者に返すように言われました。受話器を置くやいなや、玄関の外を水が走るのが見えました。堤防が壊れたのは13時ごろでしょう。とにかく1階にいた子どもたちを2階へ上げました。ちょうど男性の方が2人、迎えに来ていたのですが、すでに帰れない状態で、児童を2階に上げるなど手伝っていただきました。緊急時に男手があつたのは本当に助かりましたね。

●外部との連絡は？

30分くらいで電話は切れ、子機を持って2階に上がりましたが、これも使えなくなり

ました。携帯電話は何とか使えたので役場の事務局に連絡すると、「2階は大丈夫だから、しっかり保育してくれ。自衛隊のヘリを送る」という指示を受けました。

●ヘリが来たのはいつごろですか。

15時半過ぎです。浸水していない文化センターまで6往復してもらい、全員避難するまでに19時半ごろまでかかりました。自衛隊の黒服を子どもたちが怖がらないよう、「黒い人たちは正義の味方よ」「泣いてもいいからがんばろう」と言い聞かせました。そのころは携帯電話もつながりにくく、つながってもゴーゴーという水の音で聞き取りにくくなっていました。

●建物などの被災状況はどうでしたか。

水が流れ込んできたときは、ガーッというものすごい音がしました。水というより泥の流れです。災害の後で調べると、水の

高さは玄関の所で1.9mに達していました。ピアノも流され、丸太や家具が流れ着いてひどい状態でした。しかし、子どもたちも職員も無事だったのが何よりでした。保育所の復旧には4カ月ほどかかりましたが、多くの方に助けられ、おかげで2005年1月に開園できました。中之島町の保育所は1階建てが多いのですが、ここだけは2階建てだったので不幸中の幸いでした。

●この経験から、他の保育所へのアドバイスがあればお願いします。

今度の災害は本当に予測できないものでした。日々の仕事で忙しいとは思いますが、常に避難簿の整備や、安全に関心を持ち続けることは大切です。また、役所の事務局や近隣の保育所と意志疎通をよくしておくこと、そして地震、火災、不審者侵入、水害等のあらゆる災害を想定して、いろいろな対処方法を準備しておくことです。